

SK204 調査区の東側に位置するこの遺構は、攪乱により西辺が欠損している。直径0.7m、深さ0.2mを測る不整形な土坑である。遺物は埋土上層の赤灰色砂質土より出土しており、この層には焼土を含んでいるが、被熱による赤変は認められない。土師器の甕が出土している。(615)は口径17.2cm、外面は4条/cmの粗いハケ目調整を施し、内面はナデを施している。本来は第1遺構面の遺構であった可能性が高い。

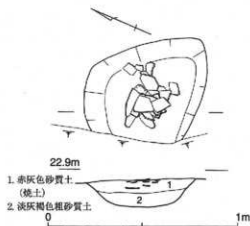


fig. 251 SK 204平面・断面図

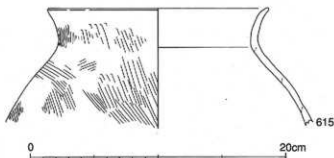


fig. 252 SK 204出土遺物

(4) 落ち込み等不明遺構

第2遺構面で検出した落ち込み等不明遺構は2基である。その内、土器の出土した遺構について報告する。

SX202 調査区の南東隅に位置するこの遺構は、SX103と切り合う。大半は調査区外へ広がるため、規模は不明であるが、深さ0.3~0.4mを測る。遺構壁面はやや直立してたちあがり、壁際が周壁溝状に浅く落ち込む。このため、竪穴住居の可能性も考えられる。

(616)は口径9.8cmの小型丸底土器である。口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめている。外面調整はナデ、内面は口縁部にハケ目を施し、体部はナデを施す。

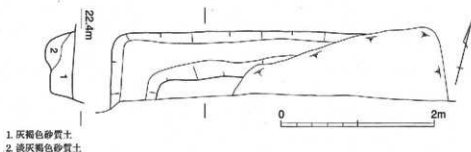


fig. 253 SX 202平面・断面図

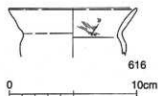


fig. 254 SX 202出土遺物

第3節 第1遺構面の遺構と遺物

北から南に傾斜している地形を後世に削平したため、調査区の北半は南半より0.5m程度高くなっている。そのため、第1遺構面は古墳時代・古代・中世の遺構が同一面で検出された。

遺構には竪穴住居2棟、掘立柱建物3棟、井戸1基、土坑、ピット等多数が確認されたが、以下主要な遺構について概要を述べる。

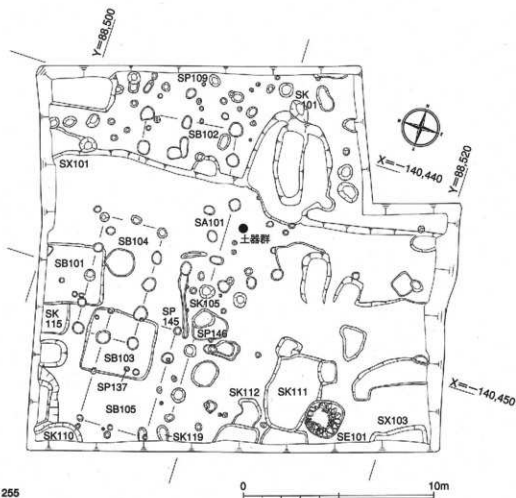


fig. 255
第1遺構面平面図

(1) 竪穴住居

第1遺構面では竪穴住居を2棟検出した。いずれも小型の方形建物で、カマド等はみられない。調査区の南西に集中している。

SB101 調査区の西辺に位置する南北約3.2m、深さ0.4mの小型の竪穴住居である。西辺は調査区の外へ広がっているため、東西の長さは不明であるが、おそらくは正方形を呈すると思われる。SB104と切り合っている。住居内でピット数基を検出したが、この建物に伴うものであるかは判然としない。周壁溝・カマド等はみられない。

床面より少し浮いた状態で、甕 (617)、高坏 (620~624)、鉢 (618・619)、甌 (625) が出土した。古墳時代中期と考えられるが須恵器は出土していない。

(617) は口径14.4cmの甕で、底部は欠損している。底部の割れ口にも煤が付着している。

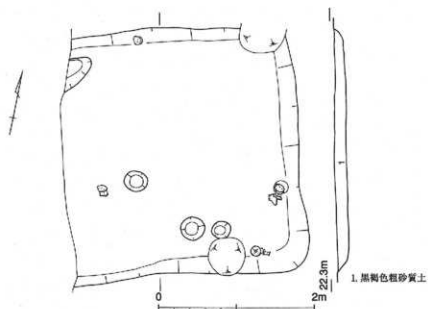


fig. 256 SB 101平面・断面図

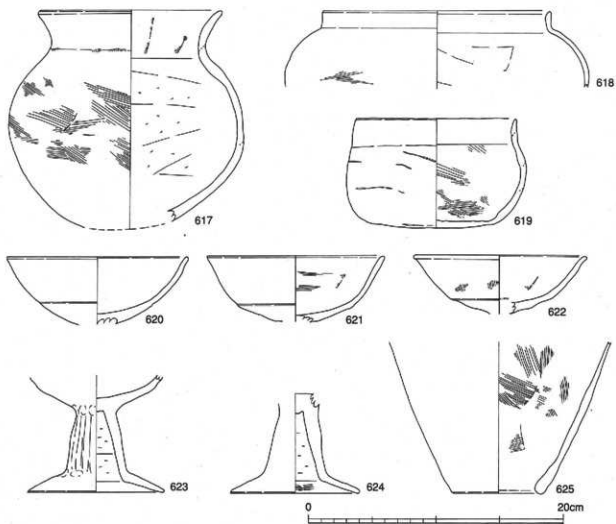


fig. 257 SB 101出土遺物

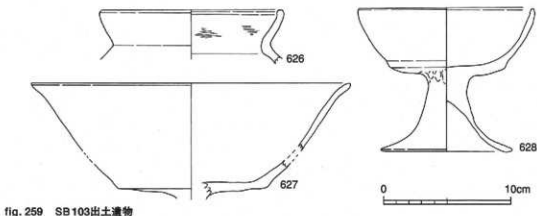
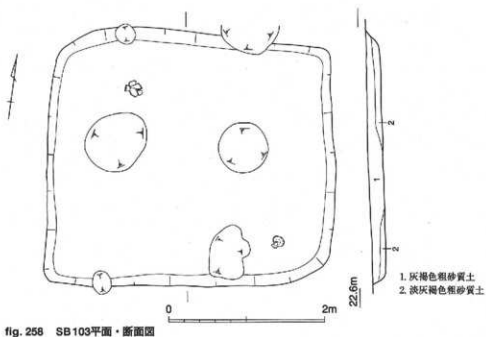
口縁部外面はナデ、体部外面はハケ目後ナデを施し、口縁部内面はハケ目調整、体部はヘラケズリを施している。

(618) は口径17.7cm、口縁部が短く直立し、口縁端部は内傾するようにおさめる鉢と思われる。磨減しているが外面はハケ目調整、内面は板ナデと考えられる。(619) は口径14.0cm、器高12.5cmの完形の平底小型鉢である。粗雑なつくりで、外面はナデを施すものの、粘土紐接合痕が明瞭に残る。内面はハケ目調整を施している。

高坏は5点図化できた。坏部は塊形のもの(620)と、坏体部と口縁部界に稜をもつもの(621・622)がある。口径は13.6~14.0cm、口縁端部は丸くおさめている。脚部はいずれも内面にヘラケズリを施す。脚部(623)は外面にヘラミガキを施し、(624)は磨減のため外面の調整は不明である。

(625) は甔と考えられる。底径6.4cmとやや小型で、外面はナデ調整、内面はハケ目調整を施している。器壁は薄い。

SB103 調査区の西南に位置する南北約3.8m、東西約3.4m、深さ0.2mの小型で方形を呈する竪穴住居である。SB104・105と切り合う。遺物はあまり出土していないが、高坏等が数点、いずれも淡灰褐色粗砂質土から出土している。



時期はSB101とほぼ同時期と考えられるが、近接していることから、同時に存在していない可能性も考えられる。

(626) は口径14.0cmの甕である。外面はナデ、口縁部内面は磨滅しているがハケ目調整が確認できる。(627) は坏体部から大きく外反する口縁部をもつ高坏である。口縁端部はやや外反し、丸くおさめている。口径25.0cmで調整は磨滅のため内外面ともに不明である。(628) は口径13.5cm、器高11.2cmの高坏である。坏部は坏体部と口縁部界に後をもち、内弯してたちあがり口縁端部は丸くおさめている。脚部はゆるやかに外反し、端部は丸くおさめている。調整は磨滅のため不明である。

(2) 掘立柱建物

第1遺構面の掘立柱建物はいずれも調査区の西側で3棟確認した。SB102は北半の段上に位置し、SB104・105は段下に位置する。

SB102 調査区の中央に位置する。東西2間(4.8m)×南北1間(1.5m)以上の総柱の建物である。建物主軸は西へ7°振っている。

北側には棟持柱の可能性がある柱穴があるが、南側は後世の造成によって削平されている。また、段下の面に同方向の柱穴がみられないことから、建物の規模は大きくとも南北3間程度までと考えられる。柱掘形は隅丸方形や不整円形で、深さは0.3~0.5mと浅く、柱痕はいずれも確認できなかった。出土遺物は図化できなかったが、長脚の須恵器高坏片・坏身片がある。また、柱掘形の形状等から建物の時期は、古墳時代後期後半頃と考えられる。

(629) はP2から出土した鉄製のU字形鋤先である。刃先は欠損しているが、刃先へむかって幅が広がるタイプと考えられる。U字形鋤先は古墳時代中期以降に出現していることからこの建物の上限の時期を与えられることができる。

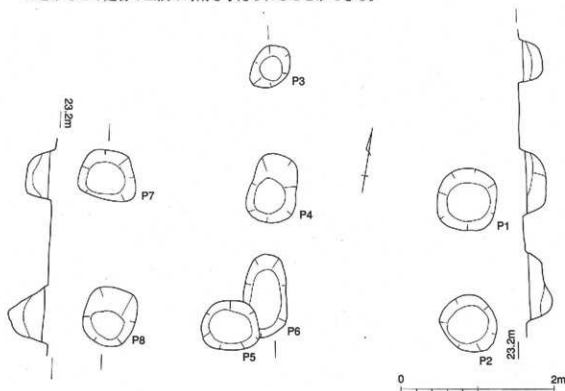


fig. 260 SB102平面・断面図

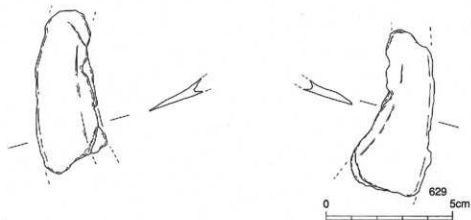


fig. 261 SB102-P2 出土遺物

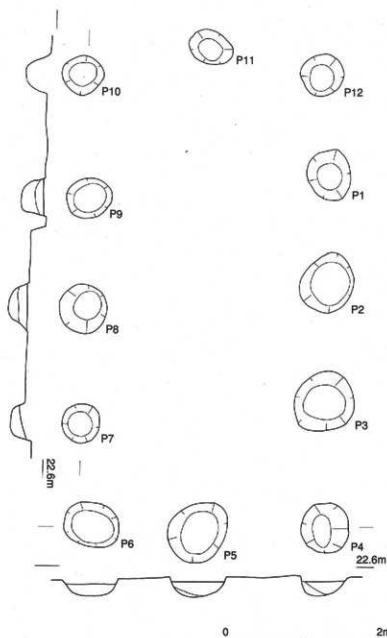


fig. 262 SB104平面・断面図



fig. 263 SB104-P2 出土遺物

SB104 SB101・103と切り合う、東西2間(3.3m)×南北4間(6.1m)の側柱の建物である。柱穴は円形で、柱間は1.4~1.6mである。建物主軸は東へ2°振っている。

柱掘形は不整形円で、直径0.5~0.8m、深さ約0.3mとSB102より小型で浅い柱掘形である。柱痕はいずれも明確でなく、抜き取っているものと考えられる。

この建物の時期は、出土している須恵器より古墳時代後期と考えられる。遺物からはSB102とさほど時間差は感じられないが、柱掘形の形状・規模等からややSB102が後出すると考えられる。

(630)は口径10.1cm、口縁部のたがひがりは内傾してまっすぐのび、端部は丸くおさめている。淡灰白色を呈す。

なお、SB104と並行して検出されたため、SB104にともなう櫓列の可能性が考えられる柱穴列をSA101としている。しかし、柱間が1.5~3.0m、規模も直径0.4~0.8mと一定ではない。また、いずれの柱穴からも遺物がほとんど出土していないため、遺物からの時期判断は困難である。以上のことから、SB104の東側にSA101が並行する可能性が考えられるという程度にとどめておきたい。

SB105 調査区の南西、SB104と切り合って存在する、東西2間(3.8m)×南北2間(6.0m)の側柱の掘立柱建物である。建物主軸はほぼ北を向いている。

柱掘形は直径0.2~0.3m程度、深さ0.2~0.4mと小型なものが多いが、一部柱痕が確認できた。柱掘形の埋土は淡灰色~淡灰褐色砂質土で、柱痕は淡灰白色砂質土であった。遺物はほとんど出土していないが、建物の時期は柱掘形の形状・埋土・規模より中世と考えられる。

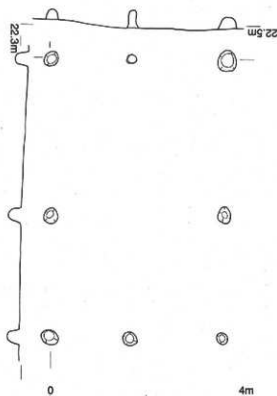


fig. 264 SB105平面・断面図

(3) 井戸

SE101 調査区の東南に位置するこの遺構は、検出面での直径1.9m、深さ2.4mのやや不整形な円形をした、石組の井戸である。底から上に向かって広がりをもつこの遺構は、直径約20～40cm程度の主に花崗岩を積み上げて造られている。上段には比較的大きい石を使用し、中間より下の部分にはやや小さめの石を使用している。また、井戸底部の側面には石がほとんど用いられていない。

石積の裏込めには石を用いず、土によってなされていた。また、井戸埋土には井戸上部の石と考えられる石が多く詰まっており、土はほとんど含まれていない。底に曲物等はなかったが、円形の掘形が認められることから、曲物等の据えられていた痕跡である可能性が考えられる。現在湧水は認められないが、黄色粗砂層まで掘削がおこなわれており、当時は湧水していたと考えられる。

遺物の出土量はあまり多くないものの、時期はおそらく中世後半と考えられる。しかし、遺物はいずれも井戸掘形内より出土しており、井戸の使用・廃絶時期を示す遺物は出土していない。

(631) は口径11.8cm、器高2.7cmの土師器小皿である。口縁部は屈曲して外上方へつまみあげている。(632) は土師質の埴である。口縁部は折り曲げてナデを施す。体部外面にはタタキを施し、口縁部にはナデを施している。内面はナデを施している。

また、図化できないが平瓦片が出土している。

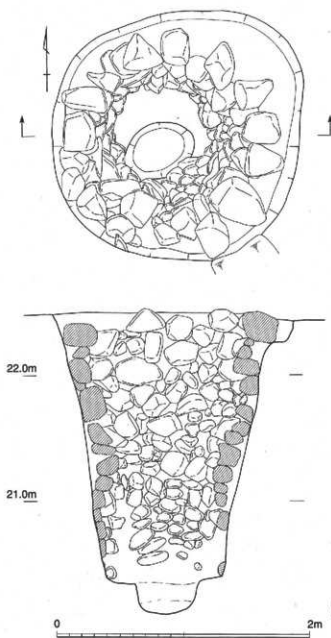


fig. 265 SE101平面・立面図

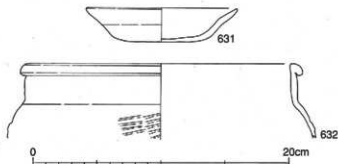


fig. 266 SE101出土遺物

(4) 土坑

第1遺構面では土坑を20基あまり検出した。調査区の東側では攪乱の影響もあって、やや希薄となっている。

SK101 調査区の上段に位置するこの土坑は、直径1.0m、深さ0.3mの不整形な円形を呈する。遺構埋土に焼土が混じっている。

遺物はほとんど出土していないため、時期不明であるが、勾玉状の土製品が1点出土している(633)。黒褐色を呈し、断面は不整形な楕円形である。

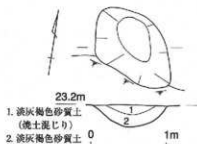


fig. 267 SK101平面・断面図

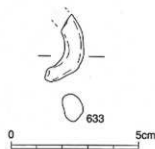


fig. 268 SK101出土遺物

SK105 調査区のほぼ中央に位置する、長径0.8m、短径0.6m、深さ0.3mの楕円形を呈する土坑である。この土坑の上面からは上半分を欠損した長胴の甕の胴部が出土している。

(634) は平底であるものの、やや丸みをもった底部である。外面は7条/cmのハケ目調整の後にナデを施す。内面はナデを施している。

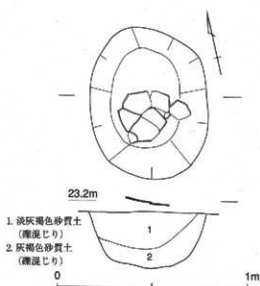


fig. 269 SK105平面・断面図

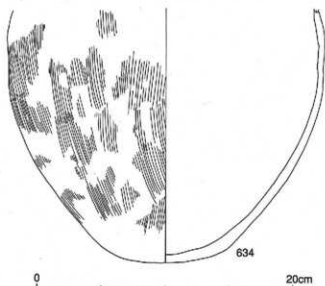


fig. 270 SK105出土遺物

SK110 調査区の南西隅に位置するこの土坑は長径約2.8m、深さ0.8mの不整形な円形を呈すると考えられる。大半は調査区外へ広がる。底面はほぼ平坦で、遺構埋土は6層にもおよぶため、埋没に長期間かかったと考えられる。中世の遺物が出土している。

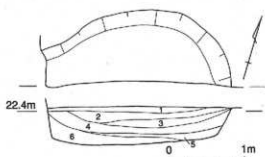
この土坑から出土した土器には土師器小皿・須恵器埴がある。

(635) は、「て」の字状口縁の退化した形態の小皿で、口径8.8cm、器高1.3cmで、内外

面の調整はナデである。(636)は口径10.2cm、口縁端部に面をもつ。

須恵器碗(637)は口径14.8cm、器高6.1cm、調整は内外面ともに磨滅のため不明で、底部には回転糸切り痕が残る。器高は高く、焼成は甘い。

また、図化できないが、白磁片が出土している。



1. 淡灰褐色細砂
2. 灰褐色粘性砂質土
3. 茶褐色砂質土
4. 淡灰褐色細砂
5. 灰褐色砂質土
6. 暗灰褐色砂質土

fig. 271 SK 110平面・断面図

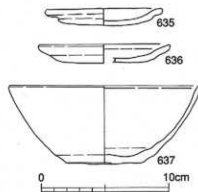
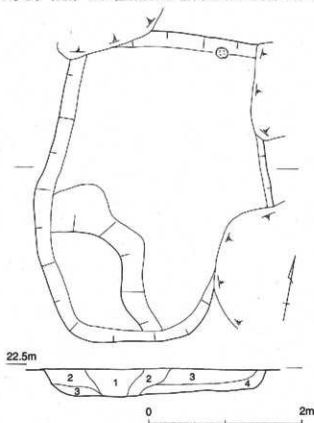


fig. 272 SK 110出土遺物

SK111 調査区の南に位置し、SE101と切り合う。長軸4.1m、短軸3.1m、深さ0.4mの不整形な長方形状を呈する土坑である。底面はほぼ平坦であるが、南西隅は一段高くなっている。北および東南を攪乱により失っている。

出土遺物には須恵器杯(639・640)、杯蓋(641)、壺(642)、甕(643)、土錘(644)、鉄製品(638)がある。遺構の時期は奈良時代と考えられる。

(639)は口径10.4cm、器高3.9cmの須恵器杯である。内外面ともにナデ、外面底部はヘラ切り未調整である。(640)は口径13.0cm、器高4.6cm、高台の付く杯である。底部外面は



1. 淡灰褐色砂質土
2. 灰褐色砂質土
3. 茶褐色砂質土
4. 灰褐色粗砂質土

fig. 273 SK 111平面・断面図

硯に転用した可能性が高い。やや焼成が甘い。

(641)は口径17.0cmの蓋である。外面には軸が認められる。(642)は口径7.0cm、肩部に沈線を一条巡らしている壺である。外面はナデ、内面は剥離しているため調整不明である。(643)は口径23.2cmの須恵器甕である。外面には軸が認められる。口縁端部は面をもっておさめている。

(644)は土師質の棒状有孔土錘である。断面は楕円形である。

(638)は断面方形の釘片と考えられる。端部はともに欠損している。

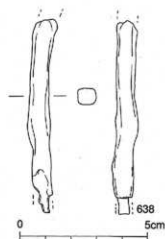


fig. 274 SK111出土遺物 (1)

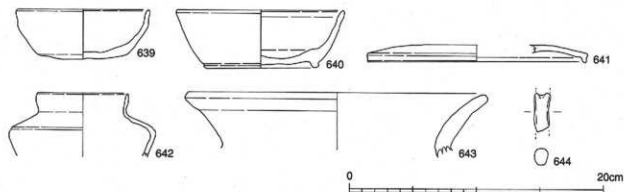


fig. 275 SK111出土遺物 (2)

SK112 調査区の南、SK111の西に位置するこの土坑は、南辺を擾乱によって失っている。短辺1.1m、深さ0.2mを測る。出土遺物より奈良時代と考えられる。土師器皿(645)は口径15.0cm、内面には放射状暗文が施されている。外面調整はナデ、口縁端部は内傾し、内面はナデを施す。胎土は精良である。



1. 淡灰茶色砂質土

fig. 276 SK112平面・断面図

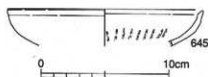


fig. 277 SK112出土遺物

SK115 調査区の西辺、SB101と切り合う。調査区外へ広がっているため、規模は不明であるが、深さ0.4mを測る。底面は平坦で、遺構壁面は直立ぎみにちあがる。SB101・103と近接すること等から切り合う堅穴住居の可能性も考えられる。ただし、柱穴は確認されておらず、遺物はほとんど出土していない。(646)はほぼ完形の手握ねの鉢である。口径4.4cm、器高3.6cm。内外面ともにナデを施す。

SK119 調査区の南辺に位置する短径0.5m、深さ0.3mの楕円形を呈する土坑である。埋土には焼土が含まれていた。出土遺物には須恵器の坏がある。(647)は口径13.0cm、外上方にひらく口縁端部は丸くおさめている。内外面には軸が認められる。

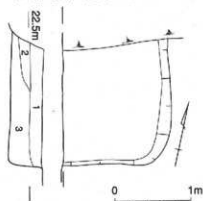


fig. 278 SK115平面・断面図

1. 灰褐色粗砂質土
2. 灰褐色粗砂質土
3. 灰黄色微湿じり粗砂質土



fig. 280 SK119平面・断面図

1. 淡灰茶色砂質土
2. 淡灰褐色砂質土

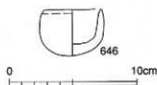


fig. 279 SK115出土遺物

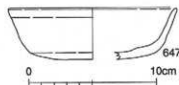


fig. 281 SK119出土遺物

(5) ビット

第1遺構面ではビット70基程度を検出したが、そのほとんどは微量の遺物しか含んでいない。(648)はSP137から出土した土師器皿で、口径7.4cm、器高1.5cm、外面調整は磨減のため不明で、内面はナデを施す。(649)はSP146出土の土師器皿で、口径7.8cm、器高1.7cm、ほぼ完形である。(650)は口径15.2cmの瓦器碗である。内外面ともにヘラミガキを施すが、外面のヘラミガキは粗い。SP109から出土している。鉄製の釘はどちらもSP145から出土している(651・652)。断面は方形を呈す。

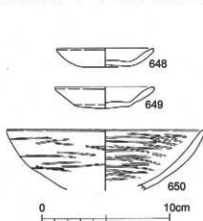


fig. 282 ビット出土遺物(1)

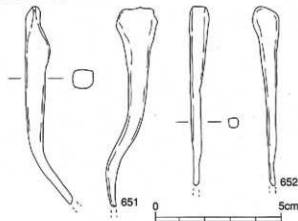


fig. 283 ビット出土遺物(2)

(6) 土器群

調査区のほぼ中央の遺構面上から土師器2点が、焼土とともに出土している。遺構面に被熱の痕跡はなく、土器にも二次焼成はみられない。

(653)は口径18.6cm、内外面ともに磨滅のため調整が不明な甕である。(654)は口径15.4cmで、「く」の字状の口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめている。外面調整は外面8~9条/cmの粗いハケ目を施し、内面はナデを施す。

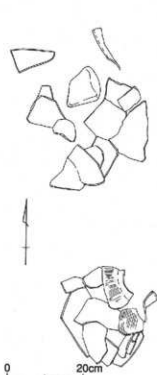


fig. 284 土器群平面図

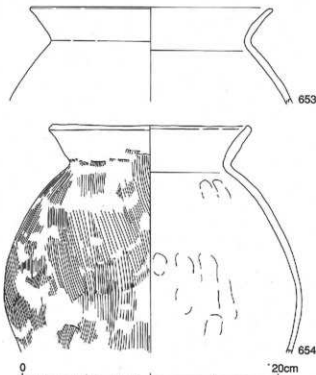


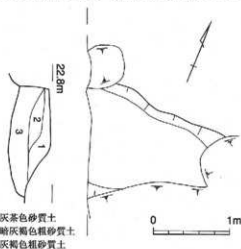
fig. 285 土器群出土遺物

(7) 落ち込み等不明遺構

用途の不明な落ち込み状の遺構を5基検出した。出土遺物を図化できた遺構についてのみ報告する。

SX101 調査区の上段、西辺に位置するこの遺構は、後世の削平によって南半が失われている。また、西側は調査区外へとのびる。現存幅15m、深さ0.5mを測る。

出土した土器には壺・甕がある。(655)は口径17.2cmの二重口縁壺の口縁部である。(656)は内外面に粗いハケ目調整を施す。(657)は壺の口縁部と考えられる。口縁は外反し、端部は面をもっておさめている。(658)は口径14.8cm、外面ハケ目調整の後ナデを施し、体部内面はヘラケズリおよび板ナデ、口縁部は横方向のハケ目を施す。



1. 灰茶色砂質土
2. 暗灰褐色粒砂質土
3. 灰褐色植砂質土

fig. 286 SX101平面・断面図

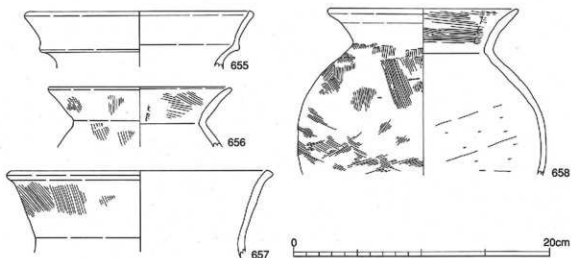


fig. 287 SX101出土遺物

SX103 調査区の南東隅に位置し、南側は調査区外へのびる。一辺3.1m、深さ0.5mを測る。底面は平坦で、遺構埋土は黒褐色粗砂質土である。遺物の出土は少ない。

(659) は口径13.8cm、体部内面にヘラケズリを施す。外面および口縁部内面はナデを施している。

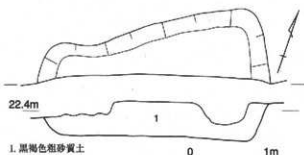


fig. 288 SX103平面・断面図

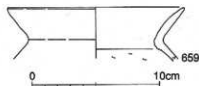


fig. 289 SX103出土遺物

(8) 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物には土師器 (660~662)、須恵器 (663~671)、土鍾 (672・673)、石包丁 (674)、石製品 (675)、金属器 (676~678) がある。

(660) は口径14.0cmの甕である。内外面ともに磨滅のため調整不明である。(661) は口径7.1cm、器高3.8cm、小型の鉢と考えられる。ほぼ完形で、調整は内外面ともにナデを施す。(662) は脚部内面にヘラケズリを施す高坏である。外面の調整は磨滅している。

(663) は口径14.4cm、(664) は口径17.0cmの坏蓋である。いずれもケズリの範囲が狭く、天井部が低い。(665~667) は器高が低く、口縁部のたちあがり内傾する坏身である。

(668) は口径12.8cmの坏である。内外面ともに磨滅しており、焼成が甘い。(669) は底部ヘラ切り未調整の高台付きの坏である。口径15.2cm、器高は低い。(671) は口径3.2cm、器高3.6cm、完形の壺である。底部には回転糸切り痕が明瞭に残る。淡緑灰色の自然釉が認められる。

(673) は完形の棒状有孔土鍾である。断面は円形で黒褐色を呈す。長さ7.1cm、重さ

68.3gを測る。(675)は軽石を加工した石製品である。平面は円形で、断面は菱形状に仕上げられている。表裏ともに「×」状の陽刻を施し、側面は帯状に削り残している。用途不明である。直径3.4cm、側面は2.5cm、重さ10.0gを測る。

(676~678)は鉄製品である。いずれも断面方形で、釘と考えられる。

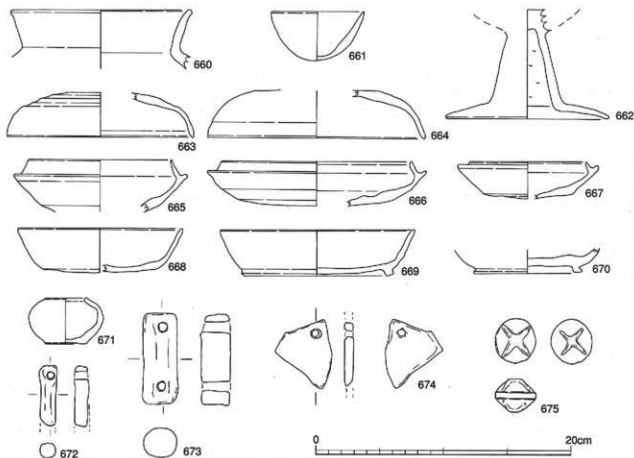


fig. 290 包含層出土遺物 (1)



fig. 291 包含層出土遺物 (2)

第4節 小結

寺田遺跡第132地点の調査は、平成12年度、調査区の西側第2遺構面までの調査を実施している。そのため今回の報告も平成12年度調査分に限っている。なお、これより下層については平成13年度に調査を実施している。

第2遺構面

第2遺構面は弥生時代後期～古墳時代前期の遺構が確認された。堅穴住居は調査区の南側に偏って検出されており、北側には自然流路が存在する。

弥生時代後期の堅穴住居はいずれも調査区外へと広がっており、形状・規模等が判然としなかった。西隣の第130地点では同時期の堅穴住居が2棟、第55地点でも堅穴状遺構が複数棟確認されているが、東隣の第127地点の西半部では同時期の堅穴住居は確認されていない。これらのことから、寺田遺跡内で当該期の堅穴住居の集中している場所の一部が明らかになったといえよう。

しかし攪乱が多い影響もあり、第2遺構面は全般に遺構が希薄で、包含層から出土する遺物も少なかった。

第1遺構面

第1遺構面は古墳時代～中世の遺構が確認された。古墳時代の遺構としては、堅穴住居2棟、掘立柱建物2棟等を検出した。堅穴住居は須恵器を含まないものの、古墳時代中期頃と考えられる。また、掘立柱建物は古墳時代後期頃と考えられ、総柱・側柱建物各1棟検出している。

堅穴住居は第127地点のSB308（一辺5m）と同時期と考えられるが、規模はいずれも1辺約3.5mと小さく、住居に伴う柱穴が判然としなかった。3棟に共通することは、須恵器を伴う時期と考えられるものの、土師器しか出土していないことである。

また、掘立柱建物はどちらも遺物の出土が少ないものの、SB104は第127地点の堅穴住居SB202と同時期と考えられる。

古代の遺構としては、建物は検出していないものの、土坑3基を確認した。また、包含層からは瓦が数片出土している。調査区の北東には芦屋廃寺が存在していたことから、流れ込んだ可能性が考えられる。

中世の遺構は掘立柱建物1棟、井戸1基、土坑等が確認された。掘立柱建物は東西2間×南北2間の側柱の建物で、同一面で同質の埋土をもつ柱穴は他に検出されていない。第127地点の西半部では、東西3間×南北2間の掘立柱建物が1棟検出され、また東半部では中世の土坑が数基確認されていることから、この時期の建物はあまり密集していないと考えられる。

第V章 寺田遺跡第133地点の調査

第1節 調査の概要

(1) 調査の方法

調査対象面積は約1100㎡であるが、掘削土の仮置き場の確保のためなどから、調査区を東地区と西地区とに大きく2分し、東地区から発掘調査を実施した。

調査は調査区全域を包括できるように5m方眼の地区設定を行い、遺物の取り上げや図面の作成を行った。地区設定は国土座標 $X = -140,475$ と $Y = 88,390$ の交点を基準とした。

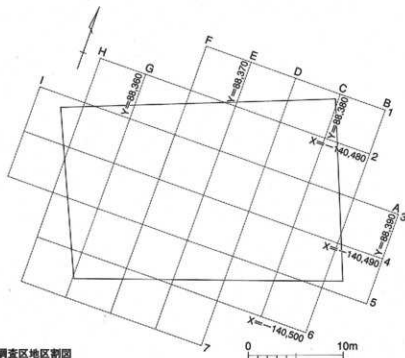
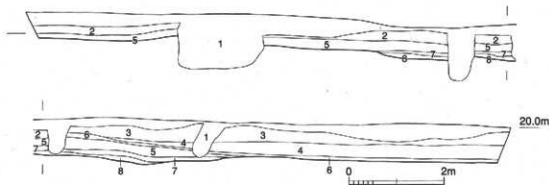


fig. 292 調査区地区割図

(2) 基本層序

盛土層の下に旧耕土・床土層があり、その下層に弥生時代から中世の遺物を含むにぶい灰茶色砂質土層が認められる。その下層には灰茶褐色砂質土層があり、上面に古墳時代後期後半から平安時代の遺構面である第1遺構面が確認される。

平成12年度はこの第1遺構面までの調査しか実施していないが、この下層には弥生時代前期の遺構面が試掘調査で確認されており、平成13年度に調査を行う予定である。



1. 盛土・掘削 2. にぶい灰茶褐色砂質土 3. にぶい茶灰色砂質土 4. 淡茶褐色砂質土 5. 淡茶褐色砂質土 6. 淡茶褐色砂質土 7. 淡茶褐色砂質土 8. 淡茶褐色砂質土

第2節 第1遺構面の遺構と遺物

現標高は約20.2m前後であるが、ゆるやかに北から南へ傾斜している。遺構面も調査区内で北から南に傾斜しており、比高差は約0.7mを測る。

調査地の中央部には、近世の水田開発に伴うと考えられるカット面が認められた。しかし、削平の影響は少なく、調査の結果は予想された以上に遺構の遺存状態が良好であり、多くの遺構を検出することができた。

時期的には飛鳥時代頃から平安時代にかけての遺構を主体としている。

この面で検出した遺構は、掘立柱建物2棟、溝6条、土坑7基、ピット多数、落ち込み3基等である。以下主要な遺構についてその概要を報告する。

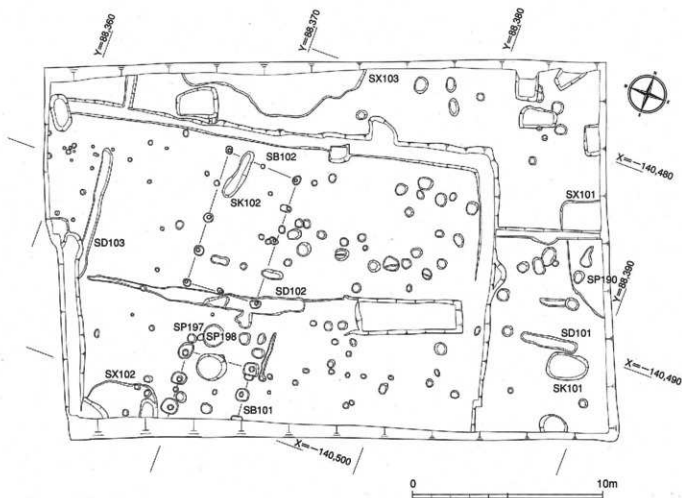


fig. 294 第1遺構面平面図

(1) 掘立柱建物

掘立柱建物は調査区の中央やや西側で、南北に並ぶように2棟を確認した。

SB101 この掘立柱建物は、南側が調査地区外へ広がるために規模は不明確であるが東西2間(3.6m)×南北2間(3.0m)以上の側柱のみで構成される建物である。建物主軸は西へ約6°振っている。

柱掘形は、一辺0.9m前後の隅丸方形から不整円形のやや大型のものである。埋土の断面

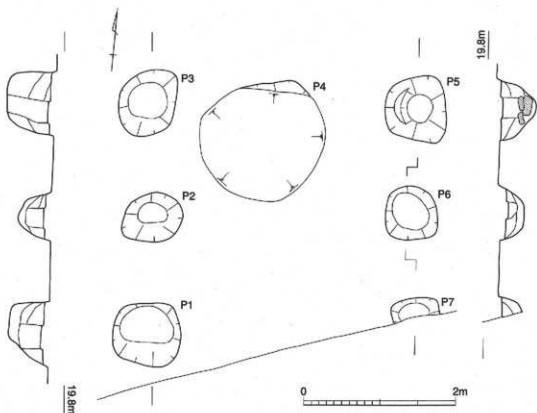


fig. 295 SB 101平面・断面図

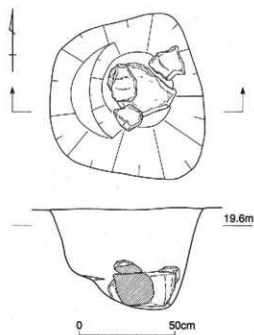


fig. 296 SB 101-P5平面・立面図

観察では柱痕が確認できるものがあり、0.25～0.3mの柱が使用されていたようである。中には、P5のように柱あたりの部分に礎を据えて根石としているものも認められた。

掘形内からは須恵器や土師器の小片が出土しているが、図化できたものは少ない。(679)は須恵器の蓋であるが、口縁部内面のかえりは消失している。口径18.6cmを測る。(680)

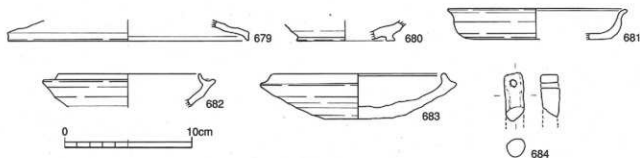


fig. 297 SB101出土遺物 (1) (679・680・682:P3 681:P5 683:P1 684:P6)

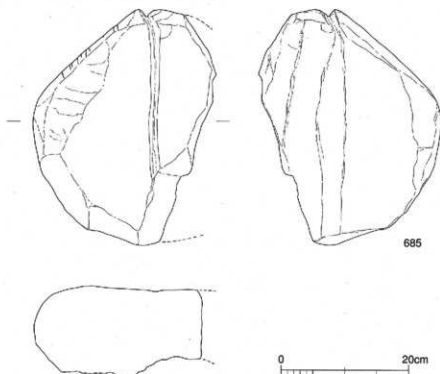


fig. 298 SB101出土遺物 (2)

は高台をもつ須恵器の坏である。(681)は土師器の皿で、口縁部に強いヨコナデを加え口縁部を大きく外反させている。口縁部の内面には浅い沈線が1条巡る。口径14.0cm、器高2.4cmを測る。以上3点の土器がこの建物の時期を示す遺物と考えられ、奈良時代に属するものと考えられる。

(682・683)は須恵器の坏身であるが、上述した土器よりも古相を示す土器である。(682)は口径11.0cm、(683)は口径13.4cm、器高3.5cmを測る。

(684)は土師質の棒状土鏝で、現存長6.5cm、直径1.5cmである。

(685)はP5の根石として使用されていた扁平な砂岩である。この礫は半分近くを欠損しているが、平面形は円形を呈していたものと推定される。残存長37.0cm、最大幅28.5cm、厚さ13.8cm、重さ19.28kgを測る。ほぼ中央部に幅2～3cmの溝を1条切り込んでいる。また、反対面にも溝のようにも観察できる段状の加工がある。この溝状の部分に紐などをかけて鏝として使用したことが想定でき、小型船に使用される碇石のようなものではなかったかと考えられる。根石に利用される以前には、片面のみが碇石として使用されていた。

SB102 SB101の北側で確認した建物で東西2間(4.0m)×南北4間(7.2m)の側柱のみで構成される建物である。建物主軸はほぼ南北方向を示している。

柱掘形はSB101よりも小型化しており、平面形では直径0.5m前後の円形から不整円形を呈するものが多い。断面観察からは柱は抜き取られたものが多いが、柱痕が確認できたものでは約直径0.2m前後の柱が使用されていたようである。

柱掘形の形態などからはSB101よりも後出する要素の高い建物と考えられる。

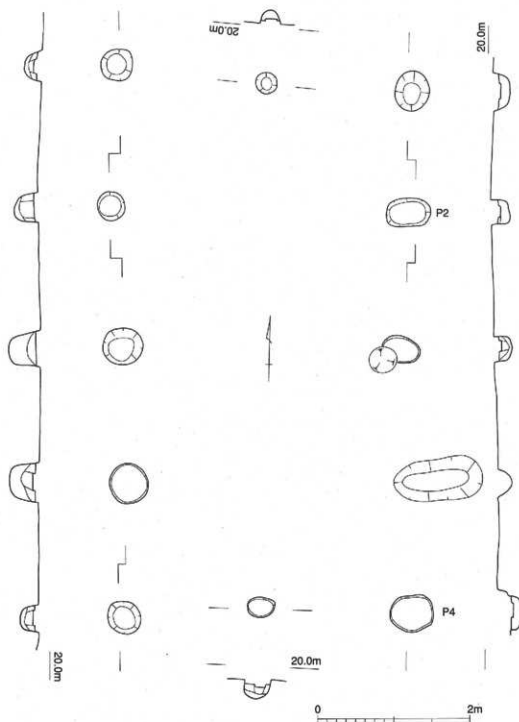


fig. 299 SB102平面・断面図

この建物の柱穴からの遺物の出土は少ないが、図化できた遺物は、磨減が著しい土師器の高台付の埴（686）である。また、図化できなかったが、内黒の黒色土器A類の埴の体部片も出土しており、平安時代にする土器と考えられる。

（687）は土師質の管状土鍾である。長さ6.5cm、最大径3.3cm、重さ70.0gを測る。

遺物と遺構の形態などから、この建物は平安時代に属すると考えられる。

（2）溝

溝は6条確認したが地形の影響もあり、ほぼ南北方向をとるものが多い。遺物を伴っているものは少なく、SD103のみであった。

SD103

調査区の西側で確認されたほぼ南北方向の溝である。南側は宅地造成の際に削平されている。現存長7.1m、幅0.6m、深さ0.1mを測る浅い溝である。

土師器の甕（688）は、口縁端部内面をわずかに肥厚させ、体部外面には縦方向のハケ目が施される。口径18.6cmを測る。

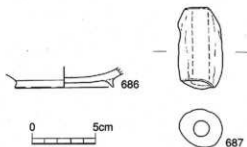


fig. 300 SB102出土遺物（686：P4・687：P2）

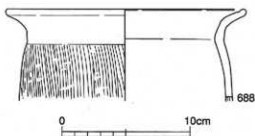


fig. 301 SD103出土遺物

（3）土坑

土坑は7基検出したが、遺物が出土した土坑はSK101とSK102である。

SK101

調査区の東端部で検出した土坑である。長軸2.2m、短軸1.4mの隅丸長方形に近い平面形を呈している。深さは0.15mで、底面は平坦である。

西端の土坑底から鉄製の刀子が1点出土している。この北側には人頭大の扁平な礫が1石置かれ、付近から土師器の坏片が出土している。このような遺物の出土状態などから、墓であった可能性が高いと考えられる。

出土した遺物は少ないが、土師器の坏1点と鉄製品がある。時期的には平安時代の遺構と考えられる。

坏（689）は口径12.6cm、器高3.6cmを測る。口縁端部が外反するように仕上げられている。調整は内外面ともにナデで、口縁部にはヨコナデを加えている。

鉄製品には刀子1点と鉄釘2点がある。刀子（690）は全長30.3cmでほぼ完存している。刃部長21.5cm、関から茎尻まで8.1cmを測る。茎部には方形を呈する目釘穴が1か所確認できる。刃部に一部遺存する木質の痕跡から、木製の鞘におさめられていたと考えられる。

鉄釘（691・692）が2点出土しているが、遺物の出土状況や土層の観察などから、木棺墓とは考えがたい。

SK102

調査区中央やや西で、SB102と一部重なるように検出した。長さ2.8m、最大幅0.8mの溝状の土坑である。深さは約0.2mである。

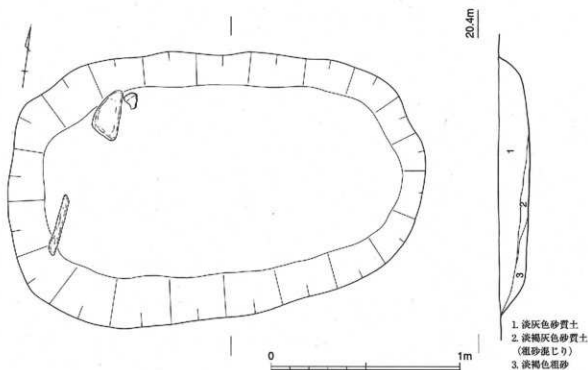


fig. 302 SK101平面・断面図

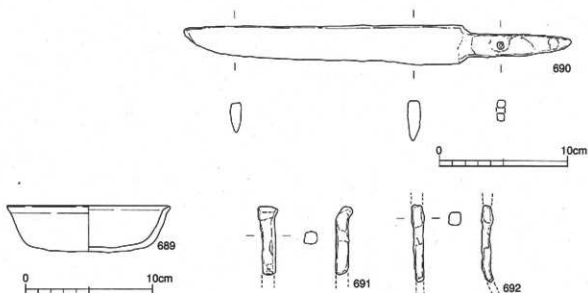


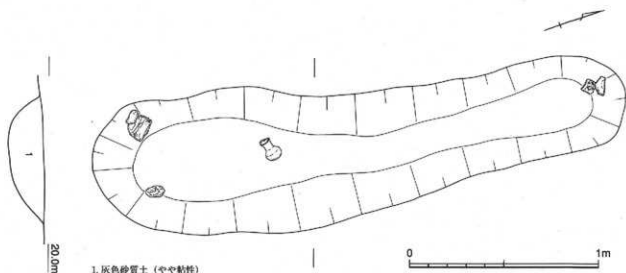
fig. 303 SK101出土遺物(1)

fig. 304 SK101出土遺物(2)

埋土から須恵器や土師器が出土している。また、この遺構検出段階に出土したため、包含層出土の遺物として取り上げたもう1点同形態の甕 (fig. 312-720) がある。

(693) は須恵器の坏蓋である。口径12.8cm、器高3.4cmを測る。(694) は須恵器の坏身である。口径12.4cm、器高2.7cmを測る。(695) は口縁部を欠損しているが須恵器の甕である。頸部と胴部に沈線を1条巡らす。

(696) は土師器の飯蛸壺である。口径5.0cm、器高10.4cmを測る。



1. 灰色砂質土（やや粘性）

fig. 305 SK102平面・断面図

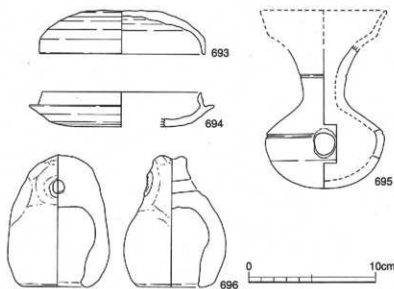


fig. 306 SK102出土遺物

（４）ピット

ピットは100基以上が確認されたが、その多くは図化できるような遺物を伴っておらず、その所属時期を明確にすることはできなかった。ここでは、図化できた遺物を伴っていたピットについてのみ報告する。

SP190 調査区東端部のSX101を切り込んでいたピットである。長径0.7m、短径0.55m、深さ0.15mの不整形形を呈する。平安時代の土器がまとめて出土している。

(697) は須恵器の蓋である。(698・699) は土師器の皿である。いずれも口縁部内面に沈線を1条巡らす。(700～702) は土師器の坏である。底部から内湾しながらたちあがる体部をもつ。いずれも磨滅が著しいが体部には回転ナデを、底部にはナデを施している(703・704) は土師器の小型の甕である。(703) の体部には把手の痕跡が確認できる。外面

はナデ、内面には板ナデが施される。(704)の外面にはタテハケが施されている。

SP197 調査区西側のSB101のP5に接するように、北側で検出した。直径0.5m、深さ0.3mの円形ピットである。

出土した遺物には鉄製品(706)が1点ある。楔状を呈するもので、基部よりも先端部分がやや広がっている。先端部にはわずかな稜が観察できる。長さ27cm、幅2.0cm、厚さ0.7cmを測る。

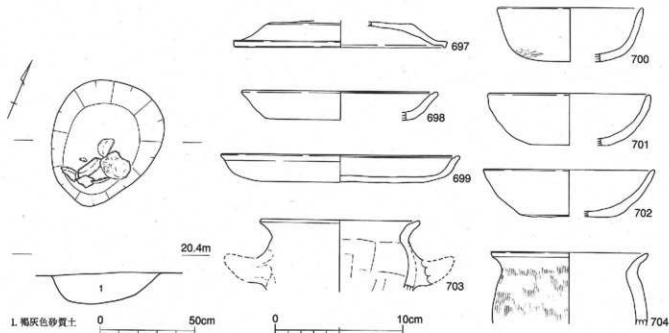


fig. 307 SP190平面・断面図

fig. 308 SP190出土遺物

SP198 調査区西側のSP197のすぐ東で検出された。東端を攪乱のために欠失しているが、直径0.35m、深さ0.15mのやや楕円形を呈するピットである。

出土した遺物には鉄製刀子(705)が1点ある。残存長8.4cmである。

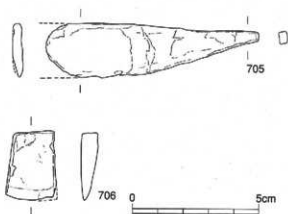


fig. 309 ピット出土遺物 (705: SP198 706: SP197)

(5) 落ち込み等不明遺構

落ち込み等は3基検出したが、遺物を伴っていたのはSX101のみであった。

SX101 調査区の東端部で検出した不定形の落ち込みで、調査地区外へ大きく広がるために規模については明確ではない。最大長6.4m、幅2.2m、深さ0.1mを測る。

遺物は弥生土器が出土しているが、この遺構の下層が弥生時代後期の遺物を多量に含む層であることから、この遺構に伴うものであったかについては判然としない。

図化できた遺物は弥生時代後期の甕形土器である。口径17.9cmで、同一個体の可能性のある底部があり、推定器高約29.0cmになる。

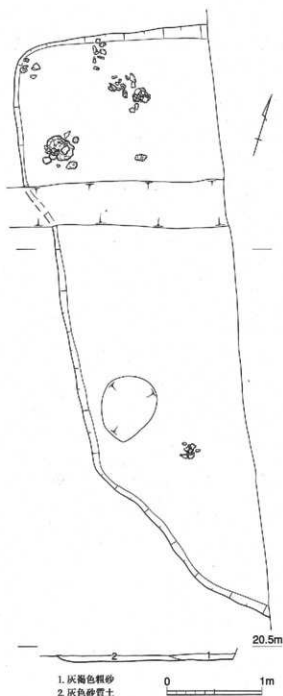


fig. 310 SX101平面・断面図

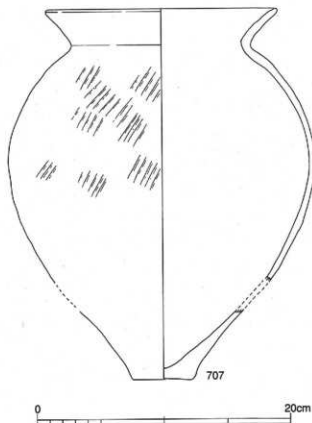


fig. 311 SX101出土遺物

(6) 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物としては、遺物包含層から出土したものや、遺構面を精査中に出土したものなどがある。

出土した遺物は比較的多かったが、図化することのできた資料は少ない。出土遺物には弥生時代から中世までのものが含まれている。

(708～712)は土師器である。(708)は小皿で、いわゆる「て」の字状の口縁を呈する平安時代後半に属するもので、口径9.6cm、器高0.9cmを測る。(709)は大皿である。口径14.0cmを測る。(710～712)は坏であるが、(712)は高台をもつものである。(710)は口径12.0cm、器高2.9cmを測る完形品である。(711)は口縁部内面に浅い沈線を1条巡らす。口径13.4cm、器高3.0cmを測る。(712)も口縁部内面に浅い沈線を1条巡らす。口径14.8cmを測る。

(713～720)は須恵器で、(713)は宝珠形つまみをもつ蓋である。口径11.0cm、器高2.9cmを測る。(714)は高台をもつ坏で、口径14.1cm、器高3.7cmを測る。(715～718)は古墳時代後期末の坏蓋と坏身である。(718)はやや大型の坏身で口径15.2cm、器高3.9cmを測る。(719)は高坏の脚部、(720)は口縁部を欠損している甕である。これはSK102付近を精査中に出土したもので、SK102に伴う遺物であった可能性もある。

(721)は土師器の飯蛸壺である。(722)は土師質の有溝土錘である。長さ6.7cm、最大幅3.0cmを測り、重さ46.6gである。(723・724)は土師質の棒状有孔土錘である。(724)は完形品で長さ5.8cm、直径1.5cm、重さ15.0gを測る。

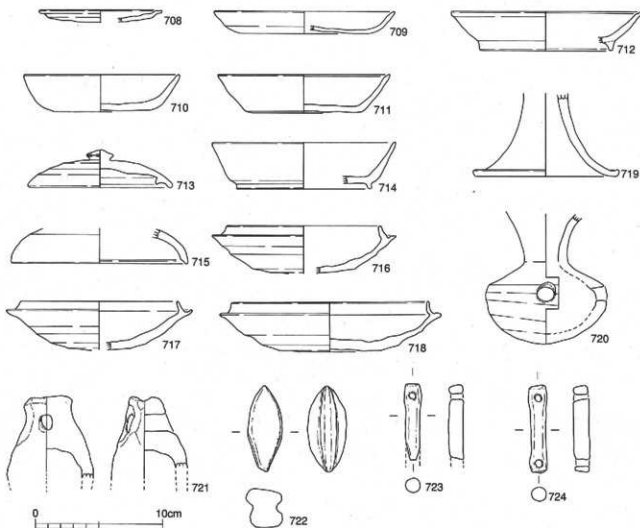


fig. 312 包倉層出土遺物(1)

(725) は鉄鏝である。端部を欠損しているが、残存長7.8cm、最大幅2.7cmを測る。(726) はほぼ完形品であるが、用途不明の鉄製品である。全体に丸みをもつように整形されており、中央部がややくぼむように仕上げられている。最大幅4.0cm、長さ2.6cm、厚さ1.3cmを測る。

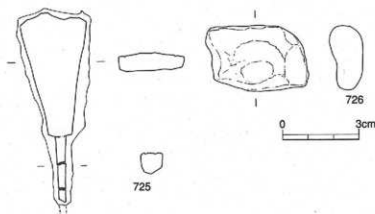


fig. 313 包含層出土遺物 (2)

第3節 小 結

今回の調査では、奈良時代から平安時代にかけての遺構・遺物を中心として検出することができた。遺構の中で注目されるものとしては時期を異にする掘立柱建物2棟と、墓の可能性のある土坑をあげることができる。

掘立柱建物SB101は奈良時代に属すると考えられる建物であるが、SB102については平安時代前半段階まで下る建物であることが明らかになった。これまでの寺田遺跡の調査では、平安時代前半の集落の様相についてはあまり明確ではなかったが、この南側の第1地点でも平安時代の可能性のある建物が確認されていることから、この付近を中心に平安時代の集落が存在するものと判断できる。寺田遺跡で、奈良時代以降も連続と集落が営まれていることを示すものといえる。

建物については、奈良時代と平安時代では掘形規模に大きな格差を認めることができる。この地点では、平面形が一辺1m近くの方形を呈するものから、直径0.5~0.6mの円形の掘形のものへと変化している。また、柱間も長くなる傾向が認められる。建物構造の変革がこの段階にあったことを示しているのであろう。

また、土坑SK101は供えられたとみられる完形品の刀子や土器をもつなど墓の可能性を指摘することができるが、確証を得るまでには至らなかった。奈良時代から平安時代前半の墓の類例が乏しい中であって、この土坑を墓であるといえるならば重要な資料を提示できたものといえよう。

第Ⅵ章 まとめ

第1節 寺田遺跡における時期別の集落変遷

今回の調査は、寺田遺跡のほぼ中央部に巨大なトレンチを入れるような形で行った。そこで、これまでの調査で得られた成果（第1章第2節(3)参照）と合わせて、寺田遺跡の集落変遷についてみてみたい。

縄文時代以前

これまでの各地点の調査においても縄文時代後期や晩期の土器の出土が報告され、今回の第127・130地点でも縄文時代晩期の突帯文土器等が出土している。しかし、いずれも包含層からの出土であり、遺構等は確認されず集落については不明確な状況にある。

しかし、寺田遺跡の東端部にあたる第120～122地点では、縄文時代晩期（滋賀Ⅲb）段階の生活面になりうる面が確認され、芦屋川扇状地（第1章第2節(1)参照）のほぼ中央部の安定した地点に集落が存在する可能性を示している。

弥生時代以前

弥生時代前期後半になると寺田遺跡で明確な遺構が確認されるようになる。

この段階の遺構や遺物は、これまで旧東川扇状地のやや南側の地点で確認されてきた。第133地点の試掘調査でも土坑やピットとともに多量の土器が出土しており、北側へも集落が広がることが明らかになった。ただし、第133地点は扇状地の西側斜面部にあることから、集落は旧東川扇状地の中央部を南北に細長く広がっているものと推定される。

弥生時代中期

弥生時代中期の状況についてはこれまで不明確であったが、芦屋川扇状地の西側斜面で調査された第55・95地点において、中期前半（第Ⅱ様式）の遺構が確認されている。第130地点は第55地点の南側隣接地にあたり、同様に中期前半の遺構や遺物を確認することができた。しかし、遺構・遺物は散漫な状況であったことから、集落の中心部はこの北東側に広がっているものと想定される。

この扇状地西側以外では、第127地点において同時期の土坑が2基確認されている。この遺構は第127地点の西半部で確認され、これより東や南ではこの段階の遺構は未検出であることから北西側に集落の中心を想定できる。これらのことから集落は芦屋川扇状地の西北部を中心に広がるのであろうが、規模は前期後半よりも縮小傾向にあると考えられる。

その後の中期の状況については不明確であるが、中期後半段階の遺物が第55地点や第130地点で出土していることから、中期を通じて集落域には大きな変化がなかった可能性が高い。しかし、遺構に関してはより散漫な状況を呈していることから、集落規模は更に縮小している可能性もある。このような傾向は後期前半にも継続しているようで、六甲山南麓の丘陵部に展開する高地性集落との関連を考慮しておく必要があろう。

弥生時代後期

弥生時代後期前半に関しては、集落について明らかにできるような資料には恵まれていない。しかし、後期後半以降になると急激ともいえるほどに遺構が検出され、集落規模の拡大傾向が認められる。竪穴住居も芦屋川扇状地のほぼ全域で検出されるようになるが、比較的高位の地点でより多数の住居が営まれる傾向が強い。一方、西側の旧東川扇状地上では竪穴住居は未検出で、集落の中心は芦屋川扇状地上にあったものと考えられる。

この段階には東側に隣接する月若遺跡においても集落規模の拡大が認められ、一体として集落が営まれていた可能性も考慮しておく必要がある。

古墳時代前期	弥生時代後期後半から終末段階に多数の堅穴住居が検出されているが、古墳時代前期にはやや堅穴住居の検出数には減少傾向がみられる。しかし、遺物は自然流路内等から多量の土器が出土していることから、ほぼ弥生時代後期後半の集落域を踏襲しているものと考えられる。 この段階でも、西側の旧東川扇状地上には集落を広げることはないようである。
古墳時代中期	古墳時代中期の集落も前代から継続して営まれ大きな変化は認められないが、前期より堅穴住居の検出数は増加している。しかも、芦屋川扇状地の北半分に集中する傾向が認められる。この段階も、西側の旧東川扇状地には集落を広げていないようである。
古墳時代後期 ～飛鳥時代	古墳時代後期末の堅穴住居が第127地点で検出されているが、この時期まで造り付けのカマドを保有している。また、この時期に堅穴住居から掘立柱建物への建物構造の変化がみられるようである（次節参照）。 この頃から飛鳥時代（7世紀）にかけて集落は再び拡大傾向をみせる。建物は芦屋川扇状地のほぼ全域で確認されるようになり、古墳時代中期まで集落の空白域になっていた旧東川扇状地にも再び集落が営まれるようになる。
奈良時代	全面調査された範囲は限られているが、建物数棟が1つの群として確認されるようで、そのような群が遺跡内に点在しているようである。この点に関しては、今後の調査を待つて再度検討する必要がある。 奈良時代には寺田遺跡の北側に芦屋廃寺が既に創建されており、この寺院を中心に集落が展開しているようで、周辺の各遺跡でも奈良時代の建物が検出されている。 寺田遺跡においては、飛鳥時代と同様に数棟を単位とする建物群の展開が認められ、第127地点で確認された大型掘立柱建物は3棟で1群を構成している。
平安時代	集落は前代同様に遺跡全域にはほぼ広がっているようで、芦屋川・旧東川扇状地に集落の展開をみる。 平安時代になると集落は急速に縮小してくる。これまで集落の中心的な場所であった芦屋川扇状地上から建物が検出されなくなり旧東川扇状地を中心に掘立柱建物等の遺構が検出されるようになる。これも平安時代前半までの状況で、それ以降は中世まで集落としての状況は不明確となる。
鎌倉時代以後	鎌倉時代以後については、第127地点の東半部から遺構が多く検出され、第40・117～119地点等でも多数のピットが検出されている。また、第95地点でもピットが多数確認されており、集落の中心的な地点が数か所存在していたものと考えられる。 そして、第130・132地点でも中世（詳細な時期は不明）の小型の掘立柱建物や遺構が検出されており、集落の中心地域から距離を置いた地点では、建物が点在するような状況であったと推定される。ただし、旧東川扇状地上では中世段階の状況は不明確である。
ま と め	以上のように寺田遺跡は、縄文時代以後中世まで集落の中心地を移動しながら、連続と営まれてきた集落遺跡である。集落は弥生時代後期後半から終末期に拡大傾向をみせはじめ、古墳時代後期末から奈良時代までが最盛期であったようである。 周辺に近接する各遺跡の動向とも密接な関連が考慮されることから、今後他遺跡の動向や社会的背景を踏まえながら集落展開を検討していく必要がある。

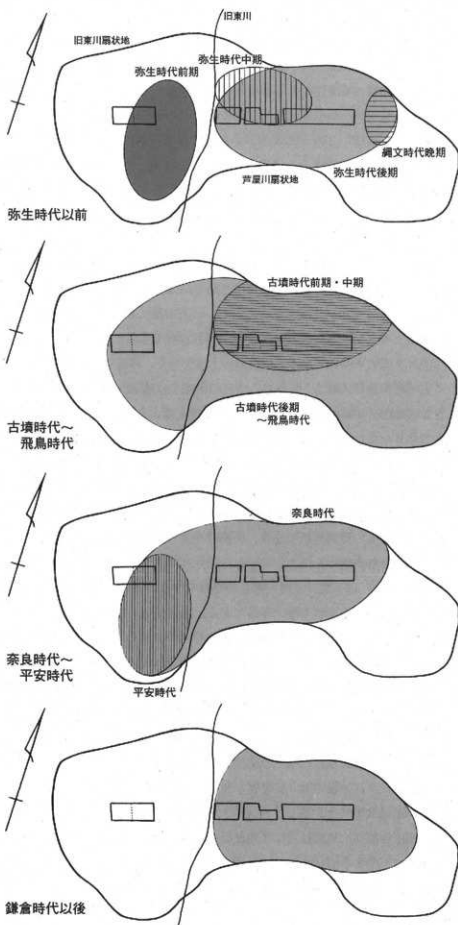


fig. 314 寺田遺跡時期別集落変遷図

第2節 建物遺構について

平成12年度、山手幹線街路事業に伴う調査の中で、寺田遺跡内で調査を実施したのは全部で4地点、延べ8615㎡である。その中で検出した建物遺構は弥生時代後期～中世までで、堅穴住居16棟（可能性のあるものを含むと18棟）、掘立柱建物17棟を数える。これら一連の調査は、標高20～23m付近で寺田遺跡を横断する位置である。

中でも、第127・130・132地点は芦屋川と旧東川にはさまれた扇状地に位置しており、地形的にも最も高い場所といえる。このため、遺構・遺物ともに良好な資料にめぐまれた。そこで、この範囲内での建物遺構の変遷を考えてみる。なお、中世の建物は、時期的に前代より継続していないことから今回は省略したい。

(1) 建物の概要

まず、今回の調査で検出した建物を、時期ごとに概要を記述する。最も古いと考えられる建物は、弥生時代後期後半の堅穴住居である。方形ないし長方形を呈す。(1)は長軸5.5m、2本柱で中央土坑を備える。(2)は不定型に巡るベット状遺構をもつ。(3)もほぼ同時期と考えられる長軸4.0mの小型の堅穴住居である。続いて(4)の掘立柱建物がある。3間×3間の東西棟である。遺物の出土は少なく、古墳時代前期に下る可能性もある。

古墳時代前期に属する資料は、今回の調査では確認されていない。ただし、第132地点のSX202はこの時期の堅穴住居である可能性も考えられるが、遺構の大半は調査区外へ広がっており、また遺物の出土も少なく明確にはできない。

古墳時代中期にはいと(5)のようにカマドを有する堅穴住居が確認される。この住居は周壁溝を備え、中央には浅い土坑をもち、4本柱である。須恵器は出土していない。(6・7)は一辺約3.5mの小型の堅穴住居で、住居に伴う柱穴が判然としていない。(8・9)はカマドをもつ堅穴住居であり、時期は中期後半と考えられる。(9)からは移動式のカマドと考えられる破片も出土している。(10)はカマドをもたない堅穴住居で、4本柱と考えられる。(11)は3間×4間の掘立柱建物であり、後期の建物と考えられる。(12)は東辺にカマドをもつ4本柱の堅穴住居である。堅穴住居の中では最も大きく、長軸は5.3mを測る。(13～15)は(12)と同時期の掘立柱建物である。(13)は4間×5間以上、(14)は2間×4間の南北棟である。(15)は3間×4間の東西棟であるが攪乱が著しい。

飛鳥時代は3棟の掘立柱建物が確認されている(16～18)。やや方形に近い柱掘形をもつ建物も確認できる。(17)は3間×3間の南北棟の側柱建物である。布張り状の柱掘形が確認できるが、柱を抜き取った時にできたものと考えられる。(18)は2間×4間の南北棟で、今回の調査で検出された唯一の総柱建物である。

奈良時代には4棟の掘立柱建物が確認されている。(19・20)は方形の柱掘形をもち、建物規模は飛鳥時代と比較してかなり大きなものとなっている。特に(20)は今調査最大の面積66㎡を測り、南側柱列は2列となっている。(21)は柱を抜き取っているために、柱掘形がやや不整形な形状を呈し、円形のものも含まれていることから、(19・20)よりやや後出的であると考えられる。

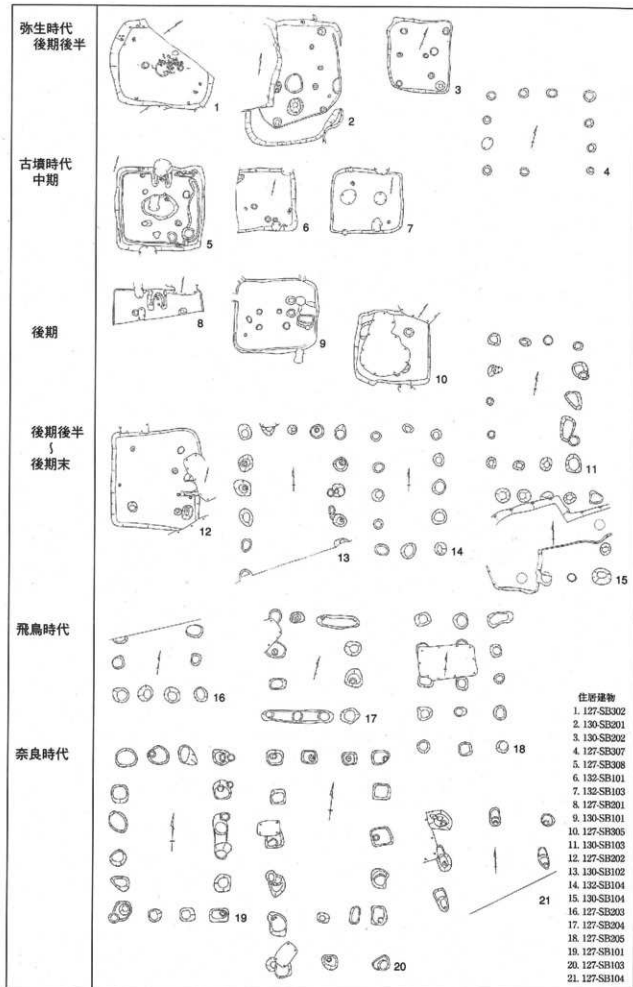


fig. 315 建物変遷図

(2) 建物の時期的変遷

まず、今回の調査では多数の建物が検出できたことから、時期的な変化について考えてみたい。堅穴住居は、弥生時代後期後半(1)から古墳時代後期末(12)にかけて16棟検出している。対して掘立柱建物は弥生時代後期後半～古墳時代前期と考えられる(4)があるものの、おおむね古墳時代後期の(11)から連続して確認している。(12～15)はほぼ同時期のTK209前後(陶器編年)と考えられるが、掘立柱建物の数がこの時期を境に急増しており、堅穴住居から掘立柱建物への移行時期と推測できよう。次に、寺田遺跡周辺の遺跡の状況を参照してみたいと思う⁽¹⁾。

寺田遺跡の北東に位置する月若遺跡では、弥生時代後期から5・6世紀にかけて堅穴住居が多数検出され、その後6世紀末～7世紀にかけて掘立柱建物へと移行するとされる⁽²⁾。

神戸市中央区に所在する生田遺跡においては、5世紀中頃の堅穴住居1棟の後、6世紀前葉には掘立柱建物が6棟確認されている⁽³⁾。これらの掘立柱建物は切り合うため、Ⅱ時期が考えられている。しかし、それに後続する堅穴住居が1棟検出されている。

神戸市東灘区に所在する郡家遺跡は、菟原郡衙が想定されている遺跡である⁽⁴⁾。弥生時代後期から続く堅穴住居は古墳時代、6世紀後半まで確認されている。そして、堅穴住居の検出例が最も多いのは5世紀末～6世紀初めである。対して掘立柱建物は6世紀にはいると確認され、掘立柱建物の検出数が最も多くなるのは6世紀後半である。

神戸市西区に所在する寒鳳遺跡は河岸段丘の西辺に位置する遺跡である。この遺跡においては堅穴住居が5世紀末から6世紀前半までⅣ時期17棟検出され、6世紀代に22棟の掘立柱建物が堅穴住居に後出して展開する傾向が認められている⁽⁵⁾。またこの遺跡には大壁造りの住居が2棟確認されており、掘立柱建物に後続する6世紀中頃の時期があたえられている。堅穴住居から掘立柱建物へと移行する時期は6世紀前半～中頃である。

神戸市長田区所在の神楽遺跡では、古墳時代後期前半～後半の堅穴住居5棟、掘立柱建物6棟が切り合って検出されている⁽⁶⁾。時期的に掘立柱建物がやや後出すると考えられているが、遺物が少ないため、建物の時期的な割合は判然としない。

神戸市中央区所在の二宮遺跡は、7世紀初め頃の堅穴住居が掘立柱建物とともに検出されている⁽⁷⁾。建物の方向からⅡ時期が考えられるが、いずれも堅穴住居と掘立柱建物の組み合わせである。しかし、鍛冶関連遺構が検出されていることから、堅穴住居は住居に使用していない可能性も否定できない。

神戸市北区所在の勝雄遺跡では、7世紀の堅穴住居が確認され、8世紀に遺跡が廃絶するまでに掘立柱建物が堅穴住居に後続するように確認されている⁽⁸⁾。

神戸市北区所在の宅原遺跡は、「評」と墨書された須恵器の坏蓋が出土する等、官衙と関連の深い遺跡と考えられている。この遺跡の岡下地区では6世紀後半の掘立柱建物が数棟並んで検出されている。また、宮ノ元地区では、7世紀前半の堅穴住居と掘立柱建物が同時期に存在し、8世紀に入ると掘立柱建物のみが確認されている⁽⁹⁾。

以上、傾向として考えられることは、堅穴住居から掘立柱建物への移行は6世紀代に多く、また六甲山地の北側では掘立柱建物への移行がやや遅い傾向が認められる。寺田遺跡での移行時期は周辺の遺跡の状況とほぼ一致しているといえよう。

(3) カマドについて

次に考えられることは、竪穴住居内のカマドの位置についてである。今回の調査で検出した竪穴住居は全部で16棟、その中でカマドを備えるものは4棟であった。古墳時代中期～中期後半の(5・8)の住居においては、住居の北辺にカマドが造られているが、古墳時代中期後半以降の2棟(9・12)は住居の東辺にカマドを備えている。このことは時期によってカマドを備える位置が変化している様にもみうけられる。竪穴住居の北辺にカマドを備えることは一般的であるが、時期によって変化するものであるかは判然としない。そこで周辺の遺跡で検出されているカマドを参考に考えてみたい。

同じ寺田遺跡内、第95地点のカマドをもつ竪穴住居は古墳時代後期後半段階のものを含めていずれも住居の北辺にカマドを備えている⁽¹⁰⁸⁾。

月若遺跡は、カマドをもつ竪穴住居の割合が高いとされる遺跡である⁽¹¹¹⁾。しかし、遺構の時期が古墳時代後期にかかるものが少ないためか、この遺跡で検出された竪穴住居は住居の北辺にカマドを備える傾向にある。

郡家遺跡では、6世紀前半までのカマドはおおむね住居の北辺に備えられている。また、6世紀後半の竪穴住居でカマドをもつものは確認されていない。

寒風遺跡でカマドをもつ竪穴住居は4棟確認されているが、カマドはいずれも住居の北辺に備えている。この遺跡の竪穴住居も6世紀後半に下るものはない。

二宮遺跡においては5棟の竪穴住居が検出されているが、カマドの方向は北辺2棟、西辺2棟、東辺1棟となっている。時期はいずれも7世紀初め頃である。

神戸市西区所在の吉田南遺跡では、70棟あまりの古墳時代の竪穴住居が確認されているが、古墳時代前期の竪穴住居も多く、カマドをもつ割合は少ない⁽¹¹²⁾。カマドの方向は北辺が多いが、西辺に備えるものも確認できる。西辺に備える竪穴住居は7世紀前半とされる。

また、今回カマドをもたない竪穴住居も数棟検出しているが、カマドを備えるものと比較するとやや小型である傾向を示していると考えられる⁽¹¹³⁾。しかし、月若遺跡の調査によると、小型の竪穴住居のカマドは住居の南西隅に備えられている例も確認されている。

以上、6世紀後半までの竪穴住居は、従来よりいわれているように⁽¹⁴⁾、おおむねカマドを住居の北辺に備える傾向にあった。しかし、7世紀代の竪穴住居は北辺にカマドを備えず、東辺や西辺に備えている例があるということも判明した。これらのことから、カマドの位置は時期によって異なるという可能性も考えることができよう。

(4) 建物の方位

最後に、建物の方位について考えてみたい。地形に即した方向から真北へと志向することは従来よりいわれているが⁽¹¹⁵⁾、寺田遺跡の場合からみていきたい。今回の調査地は北から南へ傾斜するとともに、第127地点の調査区中央部を中心に東西に傾斜している。検出した竪穴住居は西へ15°前後振るものと36°振るものがある。また、掘立柱建物は弥生時代後期後半のものが西に14°振り、古墳時代後期は0°ないし、西へ10°程度振っている。飛鳥時代は西へ8°～14°振る。奈良時代はほぼ全ての建物が南北方向を示している。

寺田遺跡第1地点も北から南へ傾斜しており、奈良時代末～平安時代初期と考えられる掘立柱建物は、3棟検出されているが、いずれも西へ10°～13°振っている⁽¹¹⁶⁾。

また、神戸市長田区所在の松野遺跡では、古墳時代中期の堅穴住居・掘立柱建物が多数検出されている¹⁷⁾。豪族居館と考えられる掘立柱建物群は西へ40°、その南側にひろがる第3～7次調査の堅穴住居は西へ20°前後と東へ10°前後に振り、掘立柱建物は西へ25°前後振っているものが多い。

寒風遺跡では、堅穴住居・掘立柱建物ともに西へ20°前後振っているものが多く、時期的な傾向は判然としなない。

郡家遺跡下山田地区においては、6世紀後半の掘立柱建物が3棟調査されている¹⁸⁾。東へ13～17°振るこれらの建物はL字状に南北棟、東西棟、東西棟とならぶ規則性をもっている。また、大蔵地区では7世紀前葉の掘立柱建物が3棟確認されている。真北方向が2棟、西へ20°振るものが1棟あり、真北方向に主軸をもつ建物が後出している¹⁹⁾。

神戸市東灘区所在の深江北町遺跡は、墨書土器・帯金具・木簡等が出土する等、官衙的要素が強く、芦屋藩家の推定地と考えられている遺跡である。この遺跡から検出された掘立柱建物は奈良時代の7棟が確認されているが、建物の方向は時期が下るにつれて20°前後から5°前後へと変化する傾向にある²⁰⁾。

吉田南遺跡では奈良時代後期～平安時代前期の掘立柱建物が整然と配置されており、特に西部地域においてはⅢ時期の建物群が新しくなるにつれて、真北に近づいているとされる。

これらのことから、飛鳥時代と奈良時代の掘立柱建物を比較した場合、奈良時代の方が真北を主軸にもつ傾向にあるが、古墳時代以前のものについては規則性が感じられない。遺跡の地形が方向を左右している可能性も考えるべきであろう。

以上、平成12年度の調査で検出できた建物から、考えられることを述べてきた。今後、更なる調査の進展によって類例が増えることに期待したい。

【註】1. 引用文献の時期表現にあわせているため、古墳時代中期・○世紀が混じっているが、了承されたい。

2. 森岡秀人「月若町の先住者」『なりひら vol.15』芦屋市立美術館 1994
3. 丸山渥「生田遺跡」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1990
4. 森田稔「郡家遺跡（城の前地区）」『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1986 他
5. 黒田恭正・中村大「寒風遺跡」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
6. 前田佳久・川上厚志「神楽遺跡第7次」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
7. 谷正俊「二宮遺跡第1次」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
8. 西岡巧次「勝雄遺跡Ⅰ」神戸市教育委員会 2000
9. 黒田恭正「宅原遺跡 岡下地区」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988
神崎勝也「宅原遺跡 宮ノ元地区 1986年」妙見山麓遺跡調査会 1988
安田滋「宅原遺跡 宮ノ元地区」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1989
安田滋「宅原遺跡 宮ノ元地区」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1990
10. 重藤輝行他「寺田遺跡第95地点発掘調査概要報告書」芦屋市教育委員会 1999
11. 森岡秀人・本南アツ子「芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書月若遺跡（第19地点）」芦屋市教育委員会 1995
12. 神戸市立考古館「地下に眠る神戸の歴史展」1980
奈良大学考古学研究室「吉田南遺跡現地説明会パンフレット」1977
13. 岩松保「カマドの有る住居と無い住居—京都府南部の場合—」『京都府埋蔵文化財論集第1集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987 に「カマドの有る住居跡はカマドの無いものより大きい規模を持つようである」とされる。

14. 例としては田中久生「三重県下古墳時代後期堅穴住居内の造り付け竈の構造について」『研究紀要第8号』三重県埋蔵文化財センター 1999 がある。入口と対面する位置にカマドを設けることで、室内の気温を保つ。そのために北辺にカマドが多いというもの。
15. 例としては中尾秀正「乙訓地方における奈良時代集落の検討」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会 1986 がある。長岡京の掘立柱建物が真北であるのに対し、下層の掘立柱建物は地形に順応したもののから、新しくなるにつれて真北へと変化しているとされる。
16. 南博史編『寺田遺跡発掘調査報告書』（財）古代学協会 1985
17. 千種浩編『松野遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会 1983
口野博史編『松野遺跡発掘調査報告書 第3～7次調査』神戸市教育委員会 2001
18. 黒田恭正「郡家遺跡 下山田地区」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1989
安田滋「郡家遺跡 下山田地区」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1990
19. 菅本宏明・中村大介・平田朋子「郡家遺跡 大蔵地区第7次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
20. 山本雅和他「深江北町遺跡（第9次調査）」『平成13年度兵庫県下埋蔵文化財調査連絡会資料』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2001

カラー写真図版



寺田遺跡遠景 (南から)



寺田遺跡遠景 (北から)



第127地点 SB302 出土遺物



第127地点 SB308 出土遺物



第127地点 SX103 出土遺物



第127地点
SX104
出土遺物



第130地点 SB201 出土遺物



第130地点 SB101 出土遺物

写真図版



第3遺構面全景垂直写真

図版 2 寺田遺跡第127地点



第3遺構面(東) 航空写真



第3遺構面(西) 航空写真



第3遺構面(東) 全景写真(東から)



第3遺構面(西) 全景写真(東から)

図版 4 寺田遺跡第127地点



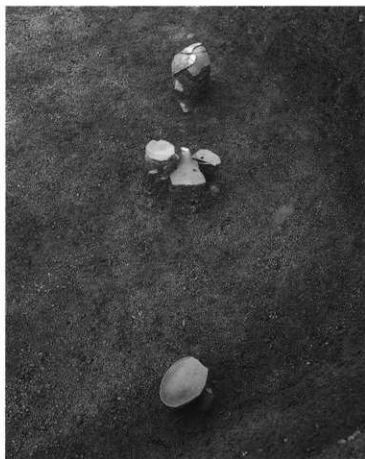
SB302 (東から)



SB302 (南東から)



SB302 遺物検出状況(南から)

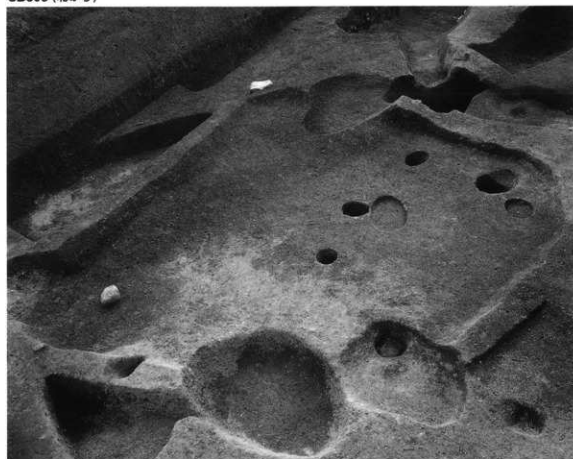


SB302 遺物検出状況(南から)

図版 6 寺田遺跡第127地点



SB303 (北から)



SB303 (北東から)



SB304 (西から)



SB305 (北から)

図版 8 寺田遺跡第127地点



SB306 (北東から)



SB308 カマド (南東から)



SB308 (南東から)



SB308 (南東から)

図版 10 寺田遺跡第127地点



SB307 (北から)



ピット群 (北西から)

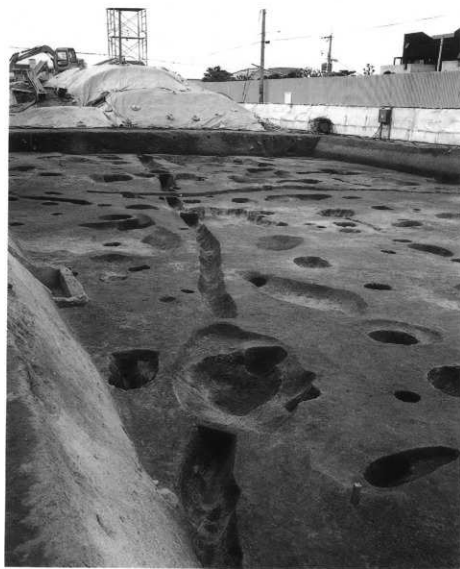


SD301 (西から)

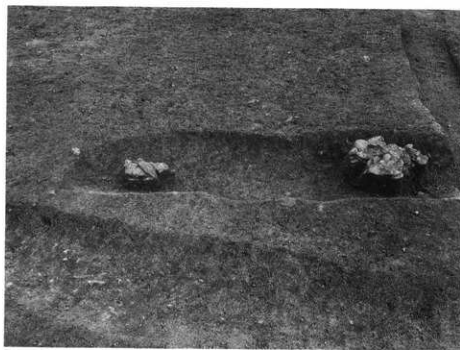


SD301 遺物検出状況 (東から)

図版 12 寺田遺跡第127地点



SD304・SK383 (北西から)



SK302 (北から)



SK359 (南から)



SK368 (北から)

図版 14 寺田遺跡第127地点



SK383 (南から)



SX309 (南から)



第2遺構面全景垂直写真



第2遺構面(東) 航空写真



第2遺構面(西) 航空写真



第2遺構面（東）全景写真（東から）



第2遺構面（西）全景写真（東から）



SB201 (北から)



SB201 (南東から)



SB202 (西から)



SB202・203・204 (北西から)



SB202 カマド 遺物検出状況 (西から)



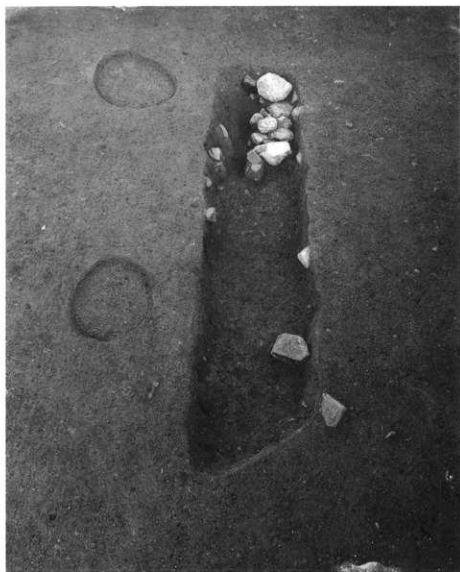
SB202 カマド (西から)



SB202・203・204 (南東から)



SB204 (東から)



SD210 (南から)



SD211 遺物検出状況 (東から)



SK213 (北から)



SX213 (北東から)

図版 24 寺田遺跡第127地点



SX213 (東から)



SX213 遺物検出状況 (北から)



SX213 上面遺物検出状況(南から)



SX214 (東から)



第1遺構面全景垂直写真



第1遺構面(東) 航空写真



第1遺構面(西) 航空写真



第1遺構面(東) 全景写真(西から)



第1遺構面(西) 全景写真(東から)



SB101 (北東から)



SB102 (北から)



SB103 (北東から)



SB104 (北西から)



SD101 (北東から)



SD101 遺物検出状況 (西から)



SK104 (東から)



SK105 (東から)



SK109 (南から)



SK132 (南東から)



SX103 (東から)



SX104 (西から)



4



17



20



22



16



1



3



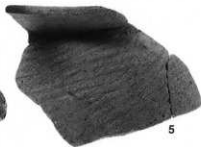
18



27



6



5



28



31



34



35



39

SB303 出土遺物

SB305 出土遺物



54



54

SB308 出土遺物 (1)





93



65



96



64



61



99



98



92



71



120



125



133



135

SK302 出土遺物



136



140



137



138

SK368 出土遺物



145

SK383 出土遺物



144



150

SX302 出土遺物



153

SX311 出土遺物



160

第3遺構面包含層出土遺物





168



167



170

SB202 出土遺物



201



197



213



214



215



216

SD201 出土遺物



227

SD211 出土遺物



228



232

SK213 出土遺物



233



234

SK220 出土遺物



243



240

SK230 出土遺物



242

SX210 出土遺物



253

SX213 出土遺物 (1)



254



264



260



256

SX213 出土遺物 (2)



267

SX214 出土遺物



272

SX215 出土遺物



270



296



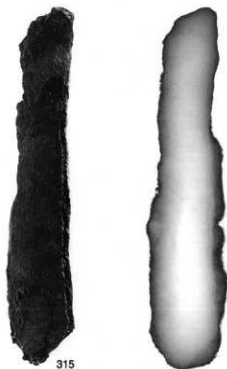
300

298



297

SB103 出土遺物



315

SD121 出土金属器 同左 X線写真



317

SK102 出土遺物



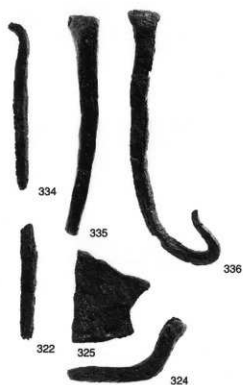
329

SK131 出土遺物



331

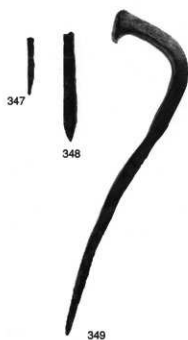
SK132 出土遺物



第1遺構面土坑出土金属器



同左 X線写真



第1遺構面ビット出土金属器



同左 X線写真



350



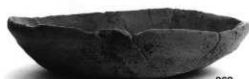
353



356

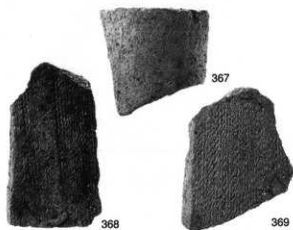


362



363

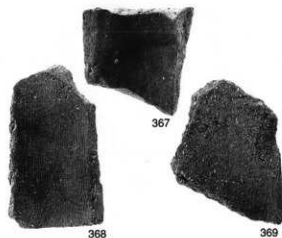
SX103 出土遺物



367

368

369



367

368

369

SX110 出土遺物



394



396



403



405



407



401



404



417

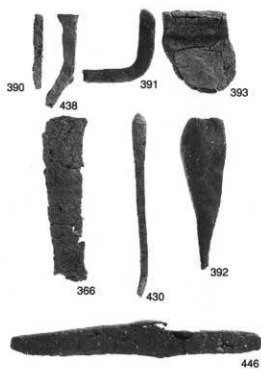


398



411





落ち込み等不明遺構出土金属器



同左 X線写真

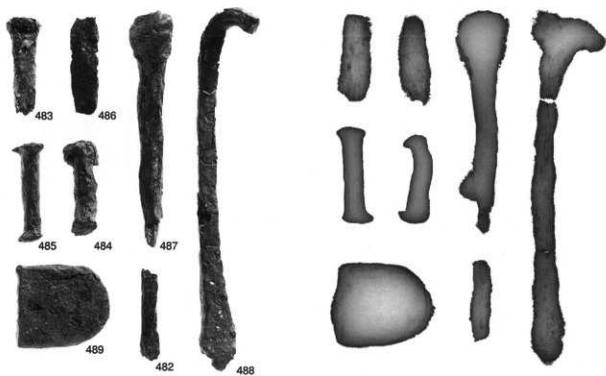


第1遺構面包含層出土遺物





土鏃



第1遺構面包含層出土金属器

同左 X線写真



第4遺構面全景垂直写真

図版52 寺田遺跡第130地点



第4遺構面（東）全景写真（南東から）



第4遺構面（東）航空写真



第4遺構面（西）全景写真（北東から）



第4遺構面（西）航空写真



第3遺構面全景垂直写真



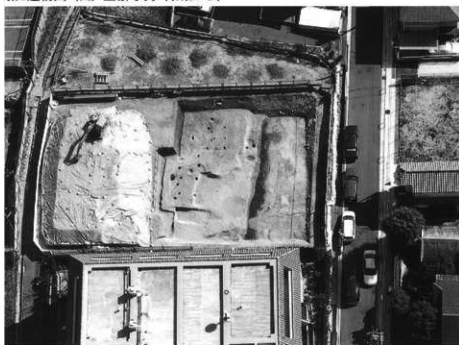
第3遺構面（東）全景写真（北東から）



第3遺構面（東）航空写真



第3遺構面（西）全景写真（北東から）



第3遺構面（西）航空写真



第2遺構面全景垂直写真



第2遺構面（東）全景写真（北東から）



第2遺構面（東）航空写真



第2遺構面（西）全景写真（北東から）



第2遺構面（西）航空写真



SB201・202 (南西から)



SB201・202 (北西から)





SK204 (西から)



SK205 (東から)

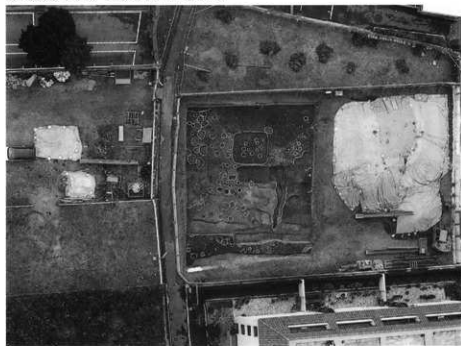


第1遺構面全景垂直写真

図版64 寺田遺跡第130地点



第1遺構面（東）全景写真（北東から）



第1遺構面（東）航空写真



第1遺構面（西）全景写真（南東から）



第1遺構面（西）航空写真



SB101 遺物検出状況（北から）



SB101（北東から）



SB101 カマド 検出状況 (西から)



SB101 カマド 完掘状況 (北西から)



SK101 (西から)



SB102 (北西から)



SB103 (南から)



東壁土層断面（西から）



南壁土層断面（北から）



北壁（旧東川）土層断面（南から）



493



492



495



496



494



第4遺構面包含層出土遺物

第3遺構面包含層出土遺物



504



505



506



507



508



509



514



511



510



512



513

SB201 出土遺物 (2)

SB202 出土遺物



517



520



521

SK204 出土遺物



523



525



524



527

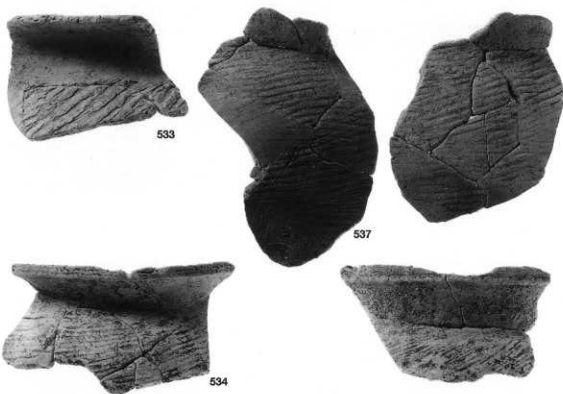


535



536

図版74 寺田遺跡第130地点



SK205 出土遺物 (2)



SP213 出土遺物

第2遺構面包含層出土遺物



549



550



552



563



557



560



566



583

SP179 出土遺物



565

567

SB101 出土遺物 (2)

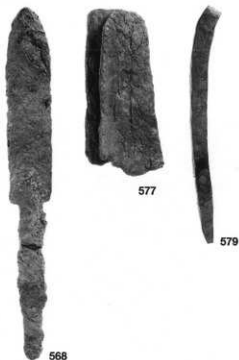


582

SP186 出土遺物



第1遺構面出土臼玉

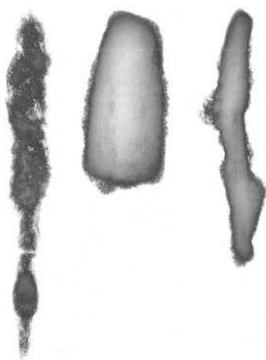


568

577

579

第1遺構面出土金属器



同左 X線写真



第2遺構面 航空写真



第2遺構面 全景写真（東から）

図版78 寺田遺跡第132地点



SB201 (北から)



SB202 中央土坑 (東から)



SK203 (南から)



SK203 遺物検出状況 (北から)



SK204 (北東から)



SX202 (北西から)



第1遺構面 航空写真



第1遺構面 全景写真（東から）



SB101 (東から)



SB103 (東から)



SB101・103 (北西から)



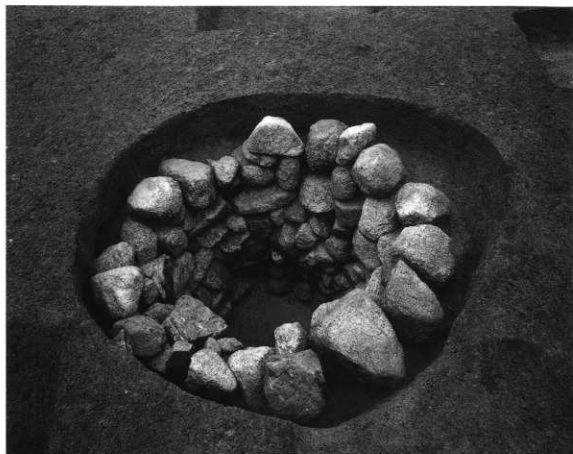
SB102 (南から)



SB104 (北から)



SB105 (北から)



SE101 (南から)



SE101 完掘状況 (南から)



605

SB201 出土遺物



604

SB201 出土遺物



615

SK204 出土遺物



619

SB101 出土遺物



617

SB101 出土遺物



629

SB102-P2 出土金属器



同左 X線写真



628

SB103 出土遺物



631

SE101 出土遺物



637



635



639



635



640

SK111 出土遺物



637

SK110 出土遺物



646

SK115 出土遺物



649

SP146 出土遺物

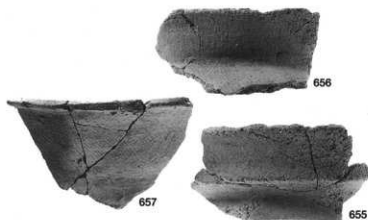


SP145 出土金属器

同左 X線写真



土器群出土遺物



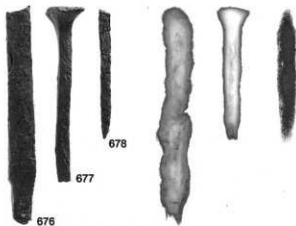
SX101 出土遺物



第1遺構面包含層出土遺物



SX101 出土遺物



第1遺構面包含層出土金属器

同左 X線写真



第1遺構面 航空写真



第1遺構面 全景写真 (西から)

図版90 寺田遺跡第133地点



第1遺構面 全景写真（北東から）



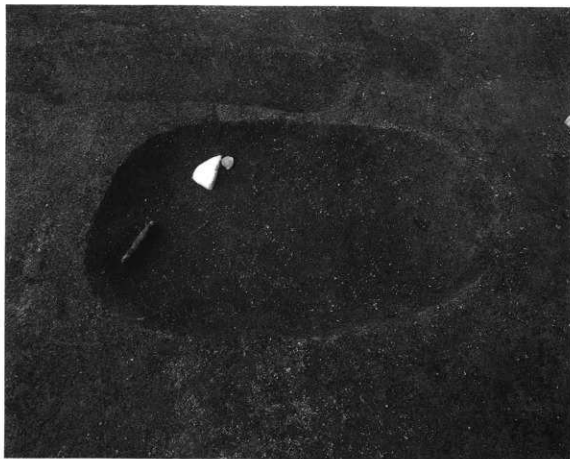
SB101・102（北から）



SB101 (北から)



SB102 (北から)



SK101 (南から)



SK101 遺物検出状況 (東から)



SK102 (南から)



SP190 遺物検出状況 (南から)



685



685

SB101 出土遺物



689



691



692



同左 X線写真



690



同上 X線写真

SK101 出土遺物



695



696

SK102 出土遺物



702



701



700



699

SP190 出土遺物



705



706



707

SX101 出土遺物

ピット出土金属器

同上 X線写真 (705)



725



包含層出土金属器

同左 X線写真



696



724



722



687

漁撈具

報 告 書 抄 録

ふ り が な	てらだいせきはつくつちょうさほうこくしょ だい127・130・132・133ちてん							
書 名	寺田遺跡発掘調査報告書 第127・130・132・133地点							
副 書 名	都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査							
巻 次								
シ リ ーズ 名	芦屋市文化財調査報告							
シリーズ番号	第43集							
編 著 者 名	前田佳久・平田朋子・中居さやか							
編 集 機 関	神戸市教育委員会							
所 在 地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町 6 丁目 5 番 1 号 TEL.078-322-6480							
発 行 年	西暦2002年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		緯度・経度		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
寺 田 遺 跡 第 127 地 点	兵庫県芦屋市 西芦屋町27番	28206		34度 43分 48秒	135度 18分 04秒	20000911 20010306	1,600㎡	都市計画 道路山手 幹線建設 に伴う事 前調査
寺 田 遺 跡 第 130 地 点	兵庫県芦屋市 三条南町 22番・23番-2					20001204 20010326	640㎡	
寺 田 遺 跡 第 132 地 点	兵庫県芦屋市 三条南町7番					20010205 20010323	410㎡	
寺 田 遺 跡 第 133 地 点	兵庫県芦屋市 三条南町 62番-24 65番-5.6					20010201 20010313	600㎡	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
寺 田 遺 跡 第 127 地 点	集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代	堅穴住居, 掘立柱 建物, 土坑, 溝, ビット		弥生土器, 須恵器, 土 師器, 鉄器		遺構面を 3面検出	
寺 田 遺 跡 第 130 地 点	集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代	堅穴住居, 掘立柱 建物, 土坑, 溝, 谷		弥生土器, 須恵器, 土 師器, 鉄器, 白玉, 石 器		遺構面を 4面検出	
寺 田 遺 跡 第 132 地 点	集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代	堅穴住居, 掘立柱 建物, 土坑, 溝		弥生土器, 須恵器, 土 師器		遺構面を 2面検出	
寺 田 遺 跡 第 133 地 点	集落跡	古墳時代 ～平安時代	掘立柱建物, 土坑, ビット, 溝		須恵器, 土師器, 弥生 土器			

芦屋市文化財調査報告 第43集

寺田遺跡発掘調査報告書

第127・130・132・133地点

—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査—

2002. 3. 31

編 著 神戸市教育委員会
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL.078-322-6480

発 行 芦屋市教育委員会
芦屋市精道町7番6号
TEL.0797-31-9066

印 刷 岡村印刷工業株式会社
奈良県高市郡高取町車木215
TEL.0745-62-2701



